

支えたパラ 今度は選手に

2020年東京パラリンピックの開幕まで3年弱。東京都内に住むマクドナルド山本恵理さん(34)は、パラ選手としての出場を目指している。過去のパラリンピックでは、選手のメンタルや通訳などサポート役として活躍。今度は、自身がパワーリフティング競技で夢舞台に挑む。

パワーリフティングで注目



パワーリフティングで20年東京パラリンピックを目指す山本さん

夢の舞台「メダルを」

山本さんは現在、日本財団パラリンピックサポートセンター(東京・港)の常勤職員として勤務。先天性の「二分骨椎症」で歩くのが難しく、車いすを使って日常生活を送る。普段は業務時間の前後や昼休みを使って週3回のトレーニングに励む。競技に本格的に取り組むきっかけは、昨年5月に仕事で関わった障害者スポーツの普及・啓発イベントだ。パワーリフティングを初めて体験したところ、40kgのバーベルを持ち上げ、競技関係者の目にとまった。当初は及び腰だったが、「トラ

い」と挑戦を決めた。神戸市出身で、スポーツとの出会いは9歳の時。パラリンピック経験者が在籍する地元の障害者水泳サークルに参加した。「私もパラリンピックに出たい」と先輩らの姿にあこがれを抱いた。それが高校2年、17歳の時、太ももにやけどを負った。その影響で褥瘡(じよくそう)や高熱に悩まされ、完治までに約2年を要した。恩師のアドバイスもあり、水泳の道を断念し、選手を支える道を選んだ。大学、大学院で心理学を専攻。08年の北京パラリンピックではメンタルトレーナーとして水泳の日本代表に同行した。12年ロンドン、16年リオデジャネイロの両大会でも通訳などのスタッフとして携わった。

が、黒潮にのってくるシ

パラリンピックに関わる時を記録したほか、今年2、3月にアラブ首長国連邦(UAE)で開催された世界大会にも出場した。山本さんは「メダルを目指して着実にトレーニングを続けていきたい」と意気込んでいる。だが、近年は10万人程度まで減少していた。閉館後、展示品の大半は都内の自宅に戻し、一部を小樽の美術館や図書館に寄贈する。全国を巡回する遺品展も計画しているという。